

山に親しみ山に想う (9)

— 郷土資料館 —

<文> =岡本=

次はどの山に登ろうかと、登山地図を見ながら検討する作業は楽しい。登山地図に視点を運んでいると、郷土資料館(歴史民俗資料館)を見つけることがあるし、実際の山行中に思いがけず資料館に出くわすこともある。資料館の展示内容は、「低山」「里山」との関わりの深いものが多いが故に、低山日帰り山行を好む者にとって、資料館は時間の許す限り立ち寄りたところである。

これまで閲覧した幾つかの資料館を紹介したい。

(1)尾県(おがた)郷土資料館

中央本線初狩駅から高川山に登り、富士急田野倉駅に向かう途中、中央自動車道下を潜って直ぐのところにある稲村神社境内にその資料館はある。明治10年(1878年)に開校した、擬洋風の小学尾県学校校舎(修復)が資料館である。教科書、教室、教育行事などの明治初期の教育環境や地域産業についての資料、民俗資料が展示されている。展示からは、農山村の、近代化に向けた教育熱の息吹が伝わってくる。尾県学校は、「邑に不学の戸なく、



家に不学の人なからしめんことを期す」を目標に、この地域の村民が拠出して建て運営したものである。当初の生徒は57名で内女子は1名だったという。傍を通る富士急は、戦前の富士山麓電気鉄道が改称したものであるが、元々木材運搬の馬車鉄道であったと係員より教えられた。

—2010年6月20日に訪問、昭和48年(1973年)に開館、入館料無料。

(注) 小学校名、邑等2箇所はあえて原文のままにした。写真—

(2)長瀬町郷土資料館



宝登山より長瀬駅方向への下山途中、宝登山神社より下った右側にある。展示内容は、民具、遺跡出土品、機織り(野上カスリ)の区分になっている。長瀬町地域の住民は、江戸時代から盛んであった養蚕に加え、畑作、山仕事、荒川の漁労で生計を立てていたことが学習できる。資料館敷地横には、国指定重要文化財の旧新井家住宅が移築されている。18世紀半ば頃に建てられたもので、養蚕農家の佇まいを観察できる。新井家は江戸期の名主であったとも言われている。

—2014年8月31日に訪問、昭和55年(1980年)に開館、入館料200円、写真—

(3) 五日市郷土館

二俣尾駅から三室山に登り、つるつる温泉で入浴して武蔵五日市駅に着いたのが14時半と早かったので郷土館に足を伸ばした。駅より20分程、五日市警察署の北側にある。郷土館は、五日市地域の里の暮らし、秋川の暮らしの他、黒八丈(泥染の絹織物)関係資料や考古資料などを展示しているが、注目すべきは五日市憲法草案の関係資料である。同憲法草案作成に主導的に関わった学習グループ「五日市学芸講談会」の開催通知や討論を記したノートなどは、明治憲法制定に関わっていこうとする五日市地域の人々の動向とその情熱を伝える貴重なものである。明治22年(1889年)の明治憲法制定を控えて、「天賦人權思想」の考えのもとに国民の政治参加を求める板垣退助らの自由民権運動が全国に巻き起こった。五日市の静かな山間の村でも機運は満ち、自由民権運動が活発となる。そして、明治14年(1881年)に和紙24枚にしたためられた204条から成る私擬憲法草案(明治憲法の大日本帝国憲法が定められる前に民間人が作った憲法文案のこと)が起草された。昭和43年(1968年)に、その私擬憲法草案が深沢家の土蔵から約1万点の古文書と共に発見された。



深沢家土蔵

その草案は基本的人権に多くの条文を割いて民主的な内容を含んでおり、学習グループ「五日市学芸講談会」の活動を通じて作成された。その中心人物は、明治13年(1880年)に五日市観能学校に赴任してきた元仙台藩士の子、千葉卓三(起草者)と深沢村の山林地主で名主の家に生まれた深沢権八(講談会の幹事で明治期に村長)である。

五日市地域は、中世の終わり頃より「市」が開かれた。江戸期には大消費地の江戸への通運が便利なことから炭、木材、黒八丈が商品となって栄え、裕福な商人や豊かな村民が誕生した。彼らは江戸(東京)の情報に常に接していた。権八は東京で出版された本の殆ど全てを所有していたという。豊かな人々が情報を入手しやすい環境にあったことが、五日市憲法草案を捻らせる苗床であったと言える。民主政治を求める五日市の地域住民の覇気たるや、現在の我々が見習うべきものである。今上天皇陛下御夫妻は平成24年1月に郷土館を御訪問された。

他日、深沢権八の生家である深沢家屋敷跡(都指定史跡)を訪ねた。武蔵五日市駅より北東へ三内川沿いに約4km遡った深沢の山里にある。広い敷地には、母屋はなくて、くだんの土蔵と立派な門扉があるのみである。敷地の裏には山を背にして、寂静(じゃくじょう)のなか深沢権八の墓がある。

—2014年10月11日に訪問、昭和56年(1981年)に開館、入館料無料、写真は深沢家の土蔵—

(4) 大滝歴史民俗資料館

秩父多摩甲斐国立公園、奥秩父大滝村の自然とその文化を訪ねて **一般200円**

大滝村立歴史民俗資料館 **入館券**

秩父御岳山から普寛神社に降りて、国道140号線を徒歩10分程(東方向)行くと、道の駅、温泉などと同じ敷地内にその資料館はある。奥秩父の原生林の様子、秩父往還、山峡の農業(焼畑農具)と山仕事、昭和初期の山村の

日常などの資料を展示している。材木搬出のキンマ(木馬)、鉄炮堰の模型と雑穀(粟、稗、黍、荏胡麻)の実物などをじっくり観ることができた。また、御林山(江戸幕府直轄の山林)の山林地域で1里半程の山域が「稼山」として入山が許され、山村民の生計を支えていたことも知り得た。
—2016年4月16日に訪問、平成5年に開館、入館料200円、写真は入館券、当時は秩父市立なのに未だ「大滝村立」となっている—

(5) 檜原村郷土資料館



鋸山林道山行の際、バスの車窓から資料館の場所を見つけたが、立ち寄ることができず、日を改めて訪問した。武蔵五日市駅前発藤倉行きバス路線の郷土資料館バス停前にある。資料館は明治32年(1899年)に開校し、昭和57年(1982年)に廃校となった共励小学校跡地に開設された。「村の歴史と伝統、恵まれた自然と生活環境の変化に改めて目を向け、ふるさと再発見の拠点となる」資料館と謳われている。要は、ひと世代、ふた世代前の、炭焼き、養蚕、山仕事を生業とする山里の暮らしを若い世代に再発見させ、檜原村の将来を考えさせようとするもののである。かつては、檜

原村では10軒中9軒まで炭を焼いており、「男になったら炭を焼け、女になったら馬を引け(炭を五日市まで運ぶ)」とまで言われた。昭和の初めに約350人いた炭焼きの人も、現在では数人という。1970年に5000人を越えた村民も2016年10月には2145人(推計)まで減少したという。学校も次々と廃校となり、現在では中学校、小学校は各1校ずつの状況になっている。このような状況の中で、如何様に再発見させていこうとしているのであろうか。

—2016年11月12日に訪問、昭和63年に開館、入館料無料、写真は資料館の看板—

(6) 浦山歴史民俗資料館

秩父鉄道浦山駅より徒歩10分程のところにある。パンフレットには、資料館は浦山ダム建設に伴う水源地域整備事業により、「浦山地域の生活文化の復元と保存・伝承を目的として建てられ、……浦山を離れた人の故郷追懐の場として利用」してほしいとある。展示は、浦山の暮らしを支えた伝統的な生業(焼畑、薪炭、山仕事)、浦山の人々の神仏への信仰、浦山の自然と歴史などを取り上げ、暮らしの足跡と変貌を主にパネルで紹介している。注目したのは、人口の推移である。江戸期1780年に約900人であった。大正期から人口が増加し、昭和35年(1960年)頃まで1200人を上回っていたが、その後、減少に転じ、昭和40年(1965年)に980人となり、ほぼ5年毎に約100人ずつ減少して、平成11年には208人にまで減少した。最多数の人口から六分の一以下になった。昭和30年代後半の高度経済成長に伴い若い世代の流出が起り、他方でエネルギー事情の変化による薪炭需要の激減、林業の不振が浦山地域の生業に打撃を与えた。時代の流れは、従来の自給自足の暮らしを一変させた。更に昭和40年(1965年)代に入り、浦山谷がダム建設地となり建設整備が進むにつれて、暮らしはかつての農林業からサービス業へと移行したという(ダム建設着手は昭和47年(1972年)、竣工は平成10年(1998年))。



—2016年12月10日に訪問、平成28年に開館、入館料無料、写真は資料館パンフレット—

暮らしぶりや民俗が様変わりする転換期に、人は転換前のそれを資料として残すために郷土資料館を作ろうとするのだろう。前述した資料館の開館は、戦後の復興が終わった後の大転換期以降である。転換期を経験した者にとって「故郷追懐の場」が必要である。訪れたどの資料館も来訪者は殆どなく、寒々としていた。年配者が足を運ぶには少々不便なところにあることもあるが、他にどんな理由があるのだろうか。転換期に山村から都会に出た若者にも世代交代が進んで、子、孫たちの時代になり、故郷を追懐する者が少なくなったからだろうか。登山姿の人もまずいない。山の自然を満喫しても、その自然が長い年月をかけて育ててきた暮らしや民俗、歴史には、それほど関心を払えないというのだろうか。今、流行りの「パワースポット」「パワーをもらった」と人々は言うが、資料館には我々の先輩が身をもって残したパワーが充満しているというのに。